

# TZ 〈ほんの窓〉

第 38 号 (2016. 3. 1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

(※詳細情報を [http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/tz/html/tz\\_038.html](http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/tz/html/tz_038.html) に掲載していますので併せてご参照ください)

## 『ドン・キホーテ』は本当に面白いか？

セルバンテス没後 400 周年を機会に古典を読んでみる

読んでいなくてもなんとなく知っている、けれども実際に読んだ人は少ない有名作品。  
読むからには通読せねばという考えに捕われて、せっかく随所にあるおいしいネタに手を付けられないなんてもったいない。

### ◆「セルバンテスはシェイクスピアと奇しくも、同じ年の同じ月の同じ日に歿したのである」<sup>1)</sup>というのは誤解です。

イギリスでは 1752 年 9 月までユリウス暦を使用していました<sup>2)</sup>。シェイクスピアの命日の 1616 年 4 月 23 日はグレゴリオ暦では 5 月 3 日にあたります。セルバンテスは 4 月 22 日金曜日に亡くなりましたが、彼の教区サン・セバスティアンの戸籍簿に記載された死亡の日付は、埋葬の日付のみを書きとめるという当時の習慣に従って、23 日土曜日になっています<sup>3)</sup>。

### ◆通読にこだわらず、順不同で寿司のようにつまんでみる。ガイドブックや注釈を醤油やワサビのようにお供にする。

「世界の名著の知名度にひかれ、教養人としての義務感にせかれて誰もが一度は手を伸ばすドン・キホーテ」「しかし期待したほどのおもしろさではない」<sup>4)</sup>。無理して読む必要はありません<sup>5)</sup>。「読書三昧がたたって脳味噌がからからに干からび、ついには正気を失って」<sup>6)</sup>しまっても困りますし。徒手空拳で読破に挑むのは、風車に突撃する(前篇第 8 章)ようなもの。解説書<sup>7)</sup>や注釈<sup>8)</sup>を参照すると、寿司に醤油やワサビを付けるように、味が断然違ってきます。店のお品書きを全種類完食を目指すのが如くページの順に先頭から通読しようとして挫折する<sup>9)</sup>代わりに、各人の好みに応じて興味関心を引く部分だけ飛び飛びに、寿司のようにつまんでみると、おいしいネタがいろいろとみつかります。

### ◆「読んでも悪くはないでしょう。だって、何かしらよいところのないほど悪い本などありませんからね」<sup>10)</sup>。

「一本の歯はひと粒のダイヤモンドよりはるかに貴重」(前篇第 18 章)、「だらしのない衣服は、心のだらしなさの証拠」(後篇第 43 章)、朝礼の訓話に引用したくなるような台詞です。ただし、「ローマは一日にして成らず」の出典を『ドン・キホーテ』とするのは、英語からの重訳で紛れ込んだ誤り<sup>11)</sup>なのでご注意ください。

### ◆専門家や高名な文学者の書いた本でも、誤読や勘違い、訂正を要する不正確な情報がしばしば混在しています。

「ああ、世にたぐいなき大胆不敵の気高き男子を物の見事に降したる騎士、この銀色の月に照らされて暗々たる騎士こそは、一個の仮装せる理髪師であった！」<sup>12)</sup>などと、得業士サンソン・カラスコを床屋のニコラス親方と混同したハイネの序文の頓珍漢を誰も咎め立てしてくれませんでした。ドイツの編集者も読んでいなかったとしか思えません。長い年月の間にいろいろな人々が、この究極のメタフィクションをめぐって、さまざまなことを書いてきました。「おそらく『ドン・キホーテ』は、それ自体の本質的な価値においてよりも、その並々ならぬ普及ぶりにおいて、より重要であるような書物の一つに数えられるであろう」<sup>13)</sup>。

### ◆マルクスが『資本論』で引用していた旅籠のマリトルネスは心やさしい女中さん。

「だから、生まれながらの水平派であり犬儒学派である商品は、他のどの商品とも、たとえそれがマリトルネスよりまづい容姿をしていても、魂だけでなくからだまでも取り替えようと絶えず待ちかまえている」<sup>14)</sup>。

「旅籠にはまた、顔が横に広くて首が短く、鼻はぺっちゃんこで片目がつぶれ、おまけに残った目もあまりきれいとは言えないアストリアス生まれの若い娘が、女中として働いていた。もっとも、彼女のいかにも愛敬のあるしぐさが、こうした欠点を補っているのも事実であった」「そして心やさしいマリトルネスは、従士の疲労困憊の様子を見てとると、この際彼に必要なのは冷たい水であろうと判断し、わざわざ井戸まで行って水差しに水を汲んできた」(前篇第 16 章)。

◆才智あふるる従士サンチョ・パンサ。鋭い洞察力や、ワインの利き酒の特技も持ち合わせています。

頭おつむに塩気がとてもちよっぴりな(de muy poca sal en la mollera)近所の農民サンチョを、<sup>インストラ</sup>島の太守に取り立ててやる、と口車に乗せてドン・キホーテは従士に雇って遍歴の旅に連れ出しました(前篇第7章)。ところが、公刊された『ドン・キホーテ』前篇を読んだ公爵夫妻が、からかいのつもりで、けれども本当に、バラタリヤ島へ派遣してみると、<sup>さばきのにわ</sup>法廷で難題を次々に見事に捌いていきます。「その場の者はみな驚嘆し、自分たちの領主を賢王ソロモンの生まれかわりかと思っただのである。」「サンチョは、自分の村の司祭からこのたびの係争と同じような話<sup>15)</sup>を聞いたことがあり、おまけに、彼はなかなか優れた記憶力の持主だったのである。実際、彼がこれは覚えておこうと思ったところすべてを覚えていたとするなら、その島のどこを探しても彼ほど記憶力のよい者は見つからなかったであろう」(後篇第45章)。

金持ちカマチョの婚礼では、恋敵バシリオの狂言自殺に一同すっかりだまされていたところへ、「この若い衆はうんとひでえ怪我をしてるにしちゃ」「えらくしゃべるだ」と逸早く指摘しました(後篇第21章)。

「わしは利き酒ってものに、生れつきのするどい勘をもってるんで、<sup>にお</sup>香いをかぐだけでね、産地と種類、味と古さ、樽をかえた度数、そのほか、ぶどう酒に大事なことを、なんでも当てるだが、<sup>てえ</sup>大したもんでがしょう。」「わしの血筋には、父方の方に、ラ・マンチャが長い年月のあいだに知った、利き酒の飛びきりの名人が二人も出てるだからさ」(後篇第13章)。

◆「ロシナンテ」は馬の名前です。驢馬ではありません。

英単語 donkey の語呂に引きずられてか、「ドン・キホーテ」を「ドンキー・ホーテ」と読み間違え、「ロシナンテ」を驢馬の名前と錯覚している人も多いかもしれませんが、Rocinante は驢馬ではなく、キホーテ殿(「ドン」Don + 「キホーテ」Quijote)が痩せ馬に付けた名前です。驢馬に騎るのは従士サンチョ・パンサ。「大好きな仲間、苦労や難儀をともにした友だち」(後篇第55章)を単なる驢馬 asno 呼ばわりしたくなくて「いつも灰毛と呼ぶことにしてるんです」(後篇第33章)。この「灰毛」rucio (ルシオ)は普通名詞です。固有名詞としての名前ではありません。

- 1) 会田由訳『セルバンテス』東京：筑摩書房，1972（筑摩世界文学大系；15），p.717-728「解説」より p.725【9080:14:15】
- 2) 岡田芳朗〔ほか〕編『暦の大事典』東京：朝倉書店，2014，p.146【4400:363】
- 3) Canavaggio, Jean(1986). *Cervantes*. ジャン・カナヴァジオ；円子千代訳『セルバンテス』東京：法政大学出版局，2000（叢書・ユニベルシタス；689），p.446【9600:96】
- 4) 岩根罔和『贗作ドン・キホーテ：ラ・マンチャの男の偽者騒動』東京：中央公論社，1997（中公新書；1395），p.ii【0800:25:1395】
- 5) Bayard, Pierre(2007). *Comment parler des livres que l'on n'a pas lus?* ピエール・バイヤール；大浦康介訳『読んでいない本について堂々と語る方法』東京：筑摩書房，2008【0100:563】
- 6) Cervantes(1605). *El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*. セルバンテス作；牛島信明訳『ドン・キホーテ』前篇1. 東京：岩波書店，2001（岩波文庫；赤721-1），第1章より p.46【0800:32:C/1016/1】
- 7) 清水憲男『ドン・キホーテの世紀：スペイン黄金時代を読む』東京：岩波書店，1990【235:93】
- 8) 注が特に豊富なのは、セルバンテス作；永田寛定譯『ドン・キホーテ』正編1,2,3;続編1,2,3. 東京：岩波書店，1948-1977（岩波文庫；赤721-1,2,3,4,5,6）(※続編3は高橋正武訳)【0800:32:C/794】
- 9) 牛島信明『『ドン・キホーテ』は日本人にとって本当におもしろいか』．牛島信明『反=ドン・キホーテ論：セルバンテスの方法を求めて』東京：弘文堂，1989，p.5-17【235:105】
- 10) Cervantes(1615). *El ingenioso caballero Don Quijote de la Mancha*. セルバンテス作；牛島信明訳『ドン・キホーテ』後篇3. 東京：岩波書店，2001（岩波文庫；赤721-6），第59章より p.173【0800:32:C/1016/K/3】
- 11) 高橋正武「ローマは一日にして成らず（研究ノート）『朝日新聞』1983年11月25日 金曜日 夕刊，p.5【ZZ:5】
- 12) Heine, Heinrich(1837). ハインリヒ・ハイネ；山下肇訳『『ドン・キホーテ』の序』『世界批評大系』1「近代批評の成立」東京：筑摩書房，1974，p.351-365より p.352【9000:18:1】
- 13) Nabokov, Vladimir; Bowers, Fredson(ed.)(1983). *Lectures on Don Quixote*. ウラジーミル・ナボコフ；行方昭夫，河島弘美訳『ナボコフのドン・キホーテ講義』東京：晶文社，1992，p.230【9600:71】
- 14) Marx, Karl(1867). *Das Kapital*. マルクス；資本論翻訳委員会訳『資本論』第1巻a. 東京：新日本出版社，1997，第1部 資本の生産過程 第1篇 商品と貨幣 第2章 交換過程 より p.144【3316:118:1a】
- 15) Jacobus de Voragine. *Legenda aurea*. ヤコブス・デ・ウオラギネ著；前田敬作，今村孝訳『黄金伝説』1. 東京：平凡社，2006（平凡社ライブラリー；574），p.65-81「聖ニコラウス」【0800:36:574】